

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23501223

研究課題名(和文) 日本民間薬の現地調査と民族薬物データベースの充実

研究課題名(英文) The investigation of Japanese Folk Medicine and enrich of the Ethmed Database

研究代表者

伏見 裕利 (FUSHIMI, HIROTOSHI)

富山大学・和漢医薬学総合研究所・准教授

研究者番号：30313620

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：3年間にわたり、富山、石川、福井の北陸3県における民間薬の使用状況について調査し、使用されている民間薬85点を蒐集した。その中ではドクダミが最も多く、また複数の民間薬を配合した薬草茶も認められた。ドクダミについては、蛍光X線分析を用いて12元素のマッピングを行った結果、カリウムが豊富に含まれることを明らかにした。複数の民間薬について『経史証類大観本草』の記載内容を日本語に翻訳した。その結果、足の悪い人はドクダミを使用しない方が良いことが記載されていた。また富山の民間薬として有名な熊胆について現地調査を行った結果、冬眠明けの熊胆が最も品質が良く、夏ばてをした時等に使用されていた。

研究成果の概要(英文)：The Japanese Folk Medicine were investigated for three years mainly about Toyama, Ishikawa and Fukui Prefecture, and 85 samples of Folk medicines were collected in this investigation. Many samples of Houttuyniae Herba which is the terrestrial part of Houttuynia cordata and the blend tea of several kinds of Folk medicines were confirmed. X-Ray Fluorescence Analyzer was performed about Houttuyniae Herba to check the 12 kinds of elements such as Potassium, Calcium and so on. The result showed that much Potassium was detected in the Houttuyniae Herba. From the old text books, the name of Keishisyourui-Taikanhonzou, the Houttuyniae Herba is not good for the legs. On the other hands, bear bile was investigated in Toyama. The best bear bile was taken after awake from hibernation and good for suffer from the summer heat. The sentence of bear bile of these books were translated from Chinese to Japanese, and the contents of this book is almost similar to the investigation on bear bile in Toyama.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：博物館学・博物館学

キーワード：民間薬 現地調査 データベース ドクダミ 熊胆

1. 研究開始当初の背景

富山大学和漢医薬学総合研究所は、先端科学技術を駆使することにより伝統医学や伝統薬物を科学的に研究し、以て東洋医薬学と西洋医薬学との融合をはかり、新しい医薬学体系の構築と全人的医療の確立に貢献することを使命としている。その中において、附属民族薬物研究センター・民族薬物資料館では、世界の諸民族が使用している伝統薬物を蒐集し、保存・展示している。現在、世界的な動きとして、伝統医学がプライマリーヘルスケアを担う医学として認識されており、日本においても漢方医学のもとで使用される漢方方剤に広く利用されている。

現代社会の中では、伝統薬の知識は失われつつあるのが現状で、特に民間薬の知識は人間が長い年月をかけて獲得した財産である。民族薬物資料館では、世界の諸民族が使用している伝統薬物を約 40 年にわたり蒐集してきている。実際に使用している生薬については、蒐集後、民族薬物資料館に保存、展示している。また得られた調査内容は、民族薬物データベースを活用して公開すると共に、資料館の一般公開や市民大学講座、講演会等を通じて公開している。

2. 研究の目的

現在、当資料館に収蔵されている日本の民間薬は数百点にすぎず、本格的な調査も行われていないのが現状である。そこで今回、北陸地区を中心とした日本の民間薬の調査研究を行い、国民の健康増進に役立つ情報を提供することを目的としている。

この民間薬の使用方法を補足するためにも、民間薬として利用されている植物について、中国宋代に編纂され、漢文体で記載されている『経史証類大観本草』の記載内容との間で比較検討する。古文献の記載内容との比較により、新たな健康食品開発や、新たな薬物資源としての利用方法も見つかることが期待される。

3. 研究の方法

(1)平成 23 年から 25 年までの 3 年間にわたり、富山、石川、福井の北陸 3 県における民間薬の使用状況について調査し、使用されている民間薬を蒐集した。平成 23 年度は、富山県を中心とした民間薬を調査研究した。調査対象として、富山県を呉東地区と呉西地区に分割し、さらに五箇山や利賀村などの山間部にわけて、薬物調

査を行った。

平成 24 年度は、石川県における民間薬の使用状況について、調査を行った。石川県は加賀地方と能登地方に大きく分かれることから、両地域で現地調査を行った。平成 25 年度は、福井県における民間薬の使用状況について、調査を行った。この 3 年間の調査を通じて、日本の北陸地区における民間薬の使用状況に関する情報を蒐集した。特に民間薬の知識は人間が長い年月をかけて獲得した財産である。得られた調査内容は、資料館で既に公開を始めている民族薬物データベースに登録し、一般公開や市民大学講座、講演会等を通じて公開している。最終的に国民の健康の維持及び増進に役立つ情報を提供することを目的とする。調査を通じて、各種文献学的な調査もあわせて行った。

(2)得られた情報を、民族薬物資料館にて公開した。当資料館として使用する一階部分は、和漢薬標本室、薬用植物標本室、遺伝資源保存室及び事務室からなる。二階部分は、伝統薬物の一般展示室 1 (漢方方剤、和漢薬等)、一般展示室 2 (アーユルヴェーダ生薬、チベット生薬等)、特別展示室 (研究成果物等) からなっている。そのため当資料館は、情報発信の場としての機能をすでに保有している。今後、当資料館において、日本の民間薬のコーナーを拡大し展示を行うとともに、民族薬物データベースに日本民間薬の情報を登録し、インターネットを介して情報を発信する。

(3)中国の宋代に編纂された薬物書である『経史証類大観本草』と対比し、本書に記載のある「ドクダミ」などの薬用植物や動物、鉱物については、漢文体の日本語への翻訳を依頼する。あわせて文字情報をテキストファイルに入力を行う。我々はこれまでに「証類本草データベース」を作成している。翻訳結果は、専門家による校正を行った後、本データベースを通じて公表している。特に民間的に富山で使用されている「熊胆」については、調査結果とあわせて考察を行う。

4. 研究成果

(1)日本の民間薬の実情について、福井、石川、富山県の北陸地区を中心に現地調査を行った結果、民間薬と共に、数種類の文献資料を入手した。主に福井県の調査で入手した文献には、各地の気候にあった薬用植物の選定がすでに

行われていた。『福井県にある薬草とその効用』(昭和25年発行)には、アカザやイカリソウ、カキドウシなど合計90種類の薬用植物が薬効と共に記載されていた。また福井県大野市の『民間薬のしおり』では、越前大野で採取、栽培が可能で、薬効の知られているアケビやイカリソウ等の民間薬について、植物の科名、生薬名、調整法、薬効、使用方法、産地について記載されていた。今回の現地調査の結果、以前、福井県、石川県、富山県の各地で薬用植物を栽培する試みがなされていたことが明らかとなった。

今回の調査を通じて、福井県市場品24点、石川県市場品37点、富山県市場品24点の合計85点を入手した。市場に流通する民間薬の中で、一番多かったのはドクダミで12点あった。またドクダミやゲンノショウコ等とともに、複数の民間薬を混ぜた健康茶が数多く流通することを明らかにした。またこの他に、日本市場で流通する日本の民間薬の中で、東京市場品63点、及び大阪市場品49点の合計112点を入手し、民族薬物資料館に保存した。これらは現在日本市場に流通している民間薬の種類をほぼカバーしているものと思われる。入手した民間薬は、すべて写真撮影を行い、富山大学和漢医薬学総合研究所の民族薬物資料館の標本番号を付与し、標本ビンに保存している。得られた内容は、民族薬物資料館で発行しているニュースレターを通じて公表している。本ニュースレターはホームページからPDFファイルをダウンロードできるようにしている。このほか民族薬物資料館の目録を作成しており、得られた内容を本書に挿入している。また、ひらめきときめきサイエンス事業の中で、日本の民間薬について、中高生を対象として2日間にわたり公表を行っている。

(2)ドクダミは日本の各地で民間薬として利用されている。その理由の一部を明らかにする目的で、エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて、ナトリウム、マグネシウム、カリウム、カルシウムなどの12元素について無機元素のマッピングを行った。その結果、カリウムの量が最も多く、ついでカルシウムの量が多かった。存在様式は、地下茎の節の部分でカルシウムが多く分布し、カリウムは少ない傾向にあるものの、葉、茎、ひげ根ではカリウムとカルシウムが検出された。この結果は、これまでに原子吸光度法を用いてカリウムが多量検出されている報告内容と合致し、民間薬として販売されているドクダミを煎じた煎じ液

には多量のカリウムが存在することが示唆された。『経史証類大観本草』の中でドクダミは『名医別録』に「藪」の原名で記載されており、「味が辛、性が微温」と記され、「湿地や山谷の陰処に多く生じる」と日本のドクダミと生育地の環境は同様であった。しかしその効果は「多食すると呼吸を困難にさせる」、「もともと脚弱の病のあるものは最も忌む」、「久しく之を食すると虚弱になる」、「食すると人の足を利せない」など、健康に際しての使用は否定的な文章が多く、現在日本で民間的に多用される面とは異なっていた。これは中国では古くからドクダミを食してきたことと、日本では煎じたものをお茶として飲んできた違いによるものではないかと考えられた。

(3)富山県では特に熊胆と呼ばれる、熊の胆汁を乾燥したものが有名で、六神丸や熊胆円などの配置薬に配合されている。調査では、熊の行動様式をはじめ、熊胆の採集法、熊胆の作成方法などについて、複数の地域で現地調査を行った。その結果、クマは本来、臆病な動物であったが、山間部でのえさの不作や、里山の崩壊とともに人家近くに出てくるようになったとことであった。クマからは、熊の肉、熊の毛皮、熊の胆のう(熊胆)が得られ、3種類ともほぼ同額で取り引きされるとのことであった。特に熊胆を取る時期として、冬眠明けの熊の胆のうが最も良く、富山では板にはさんで乾燥を行うことから、乾燥した熊胆は平たい形を呈しているのが特徴であった。一方、海外の熊胆は胆のうを吊り下げて乾燥するため紡錘状を呈するものが多いことが明らかとなった。また秋に柿の木などに登っていたところを鉄砲で撃たれた熊の胆のうは極めてすじばっており、胆汁はほとんど存在していなかった。使用法として現地では、「風邪の引きはじめで、身体がだるいときなどに、ひとかけらをお湯に溶いて飲むと良い」とのことであった。熊胆は民間的にも有名であるが、高価でかつ希少なため、一般の市場には出回らず、特別なルートで流通するようである。現在、熊胆は非常に高価なため、動物胆と称した牛や豚の胆のうが使用されるが、富山の地元の方々の中には、熊胆に対して根強い人気があることは間違いなかった。

石川県で、販売していた「熊の脂」は、ひび、あかぎれなどに外用している。『経史証類大観本草』には「熊脂」が記載されており、「味が甘、性が微寒。風痺、不仁、筋急、五蔵腹中の積聚、寒熱羸瘦、頭瘍白禿を主る」と記されており、使

用方法は異なっていた。一方、熊胆は唐代の『新修本草』になってはじめて記載され、「味が苦、性が寒、無毒。時気の熱が盛んで変じて黄疸となるもの、夏の暑い時期の長引く下痢」に良いことが記されており、現地調査の内容と似ている点が多かった。

(4)今回民間薬の調査で得られた内容は、民族薬物資料館のニューズレターの中に反映されている。ニューズレターについては今後も引き続き発行していく予定であり、その内容は、民族薬物資料館のホームページからPDFファイルをダウンロードできるようになっている。この他に、民族薬物資料館の生薬25種類に関する生薬目録[] (125ページ)ならびに、民族薬物資料館の生薬32種類に関する生薬目録[] (145ページ)を作成した。

また、富山県は古くから、「くすりの富山」と呼ばれており、県内にも売薬関連の製薬会社も多くある。これらの会社では、熊胆を含めた野生動物の部位を薬剤として用いている。これらの取り扱い方は、それぞれ独特なものがあり、後継者不足と原料の入手が困難になったことも相まって、若い世代には伝えにくい状況にあった。

生物の多様性という観点からも、世界の伝統薬物の蒐集を継続していくことは重要で、文化として、保護と利用の両面を考えていく必要がある。日本では里山の減少とともに、各地で独特の薬物文化は廃れつつある。日本各地で使用されている民間薬については情報の収集が遅れているのが現状であり、現代社会のなかでは民間薬に関する知識は日々失われつつある。民間薬の知識は、親から子へ、子から孫へと伝えられてきた人間の英知である。このままでは日本における現代の民間薬の使用状況に関しては、風化していきただけである。いわば失われていく文化遺産であることから、地道な調査が必要である。今回の研究を通じて得られる結果は、今後の伝統文化の継承につながることを期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 5 件)

伏見裕利: フィールドワークで得られた民族薬物と生薬の持続可能な利用をめざして. 第 30 回和漢医薬学会学術大会, 2013, 8, 31-9, 1, 金沢.

伏見裕利, 梅寄雅人, 小松かつ子: 日本民

間薬の現地調査と民族薬物データベースの充実. 国立大学博物館等協議会 2013 年大会(第 8 回博物科学会), 2013, 5, 30-31, 宮崎.

梅寄雅人, 伏見裕利, 春木孝之: 富山大学和漢医薬学総合研究所民族薬物資料館における情報技術の応用, 国立大学博物館等協議会 2013 年大会(第 8 回博物科学会), 2013, 5, 30-31, 宮崎.

伏見裕利, 民族薬物データベース作成委員会, 証類本草データベース作成委員会: 民族薬物資料館ポスター. 国立大学博物館等協議会 2012 年大会(第 7 回博物科学会), 2012, 6, 21-22, 京都.

小松かつ子, 伏見裕利, 民族薬物データベース作成委員会, 証類本草データベース作成委員会: 民族薬物資料館ポスター. 国立大学博物館等協議会 2011 年大会(第 6 回博物科学会), 2011, 6, 23-24, 名古屋.

〔図書〕(計 2 件)

小松かつ子, 朱姝, 伏見直子, 伏見裕利, 和漢医薬学総合研究所民族薬物資料館出版, 富山大学和漢医薬学総合研究所民族薬物資料館生薬目録[], 2014, 145

小松かつ子, 朱姝, 伏見直子, 伏見裕利, 和漢医薬学総合研究所民族薬物資料館出版, 富山大学和漢医薬学総合研究所民族薬物資料館生薬目録[], 2013, 125

〔その他〕

ホームページ等

http://shiryokanhp.inm.u-toyama.ac.jp/mmmw/addition/add_index.html

「民族薬物データベース」

<http://ethmed.u-toyama.ac.jp/Search.jp/>

中国薬草古典「証類本草データベース」

<http://ethmed.u-toyama.ac.jp/honzou/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伏見 裕利(FUSHIMI Hirotooshi)

富山大学・和漢医薬学総合研究所・准教授
研究者番号: 30313620

(2) 研究分担者

小松 かつ子(KOMATSU Katsuko)

富山大学・和漢医薬学総合研究所・教授
研究者番号: 50225570